

いちのみやの芸術文化

■ 特集「木曾川の生き物今昔」

～儒学者・細野要斎を魅了したオオサンショウウオ～

■ 「活 動」おどりを楽しむ

一宮舞踊協会 花柳こま希久

■ 「エッセイ」絞り染めのこと

一宮美術作家協会／デザイン・工芸部・彫塑部

鶴飼辰郎

■ 第74回一宮市美術展入賞者

■ これからの催し

■ 文化講演会（報告）



「一宮市」には、一宮市博物館・一宮市三岸節子記念美術館・一宮市尾西歴史民俗資料館など先人の残した文化を紹介する施設があります。私たちの「身近な文化」を学んでみませんか？

木曾川の生き物今昔

儒学者・細野要齋を魅了したオオサンショウウオ

◆オオサンショウウオ、 木曾川を流れて一宮まで

オオサンショウウオをご存知でしょうか。世界最大級の大きさを誇る両生類で、大きな頭につぶらな瞳とぱっくりあいた口、赤ちゃんのような小さな手が特徴的な生き物です。近年、河川を取り巻く環境が変化したことによって数を減らし、現在では国の特別天然記念物として保護されています。

さて、木曾川のオオサンショウウオたちについて見てみましょう。本来オオサンショウウオたちは、木曾川上流の岐阜県で生まれ、山地の清流で生活しています。しかし、基本的にゆったりとした性質であるせいか、

大水が出ると流されてしまい、
はては木曾川の下流部まで迷
い込んできた例が現在でも報告されていま
す。江戸時代にも、こうして流れ着いてき



▲オオサンショウウオ
(提供：世界淡水魚園水族館アクアトトギス)



▶細野要齋による観察図
(感興漫筆「葎之滴」六より)
名古屋市鶴舞中央図書館蔵

たオオサンショウウオが一宮市で目撃され
ており、幕末の尾張藩を代表する儒学者、
細野要齋が記した随筆『感興漫筆』^{かんきょうまんびつ}による
と、嘉永三年（一八五〇）三月十九日、水の中
にいたところを捕まえられた全長が三尺
余り（約一m）のオオサンショウウオが、
光明寺に連れて来られています。当時、オ
オサンショウウオは平地に暮らす人たちに
とって珍しい生き物だったようで、要齋も
文中に『奇異魚』と評しているほか、名古屋
屋城下や遠く江戸城内でも、見つかったオ

オサンシヨウオオが見世物とされた記録が残っています。今では天然記念物として保護されているオオサンシヨウオオですが、それ以前は山間部等で「食用」にされていたようで、美食家として知られる北大路魯山人も、著書『魯山人味道』の中で、サンシヨウオオの体を裂くとまわりに山椒の芳香がひろがり、食べるとすっぱんとふぐの合の子のような上品な味がしたと述べています。なお幸運にも、光明寺に流れ着いたオオサンシヨウオオは食べられることもなく、「竜神様の類」として丁寧に扱われ、光明寺で受戒まで受けた後、無事木曾川の支流に放され、自由の身となりました。

細野要齋は名所旧跡を訪ねて東海地方を歩き回っており、各地の「珍しいもの」に非常に目の肥えた人物であったでしょうが、その彼も思わず魅了するほど、オオサンシヨウオオは奇異なる存在であったようです。

◆古き木曾川の姿とともに、 水流のきらめきイタセンパラ

木曾川は、一宮市北方町付近で流れの向きを西から大きく南に湾曲します。この付

近に形成された入り江状の場所は、現在天然記念物の魚「イタセンパラ」のすみかとなっています。タナゴの仲間であるイタセンパラは、「板」のような平たい体と大きなヒレを持ち、秋の繁殖期になると雄の体は鮮やかな紫色（婚姻色）となるのが特徴的です。昭和三十年代ごろまではこの地域でよく見られた魚でした。しかし、木曾川を取り巻く環境が変化したことで数を減らし、昭和四十九年（一九七四）絶滅危惧種に指定



▲イタセンパラのオスとメス（展示場所：一宮市尾西歴史民俗資料館）
※オス…婚姻色を持つ中央やや左のもの メス…産卵管（卵を産むための管）を持つ中央のもの

されました。

一宮市尾西歴史民俗資料館では夏から冬の期間中、このイタセンパラを飼育展示しています。イタセンパラが泳ぐ姿を見たご年配の来館者の方からは、「私達が小さいときにはたくさんいた魚だったのにね。」というお話をよく聞きます。

◆木曾川、未来に残したい 豊かな自然

氾濫も多く、時に人の暮らしを脅かしてきた木曾川ですが、その反面、漁業や物流を担い、私たちの生活を支える存在でした。また、オオサンシヨウオオやイタセンパラのような、すみかや食べ物に細かいこだわりがある個性的な生き物たちの命を育む場となっています。この木曾川が生んだ豊かな自然を未来に向けて守り、後世まで伝えていきたいものです。

（一宮市尾西歴史民俗資料館 学芸員 奥野絵美）
参考文献

- 『木曾川町史』 木曾川町教育委員会 一九八一
- 『魯山人味道』 北大路魯山人（著）・平野雅章（編） 一九九五
- 『随筆編（2） 感興漫筆（上）』 『名古屋叢書』 第十九巻 名古屋市教育委員会

おどりを楽しむ

舞踊部門 一宮舞踊協会 花柳 こま希久

舞踊協会の事

日舞と洋舞、異文化ですがどちらも古典同志、昭和二十八年に一宮舞踊協会が設立し、六十三年が経ちました。その間変動も有りましたが、今年の五月、六代目会長として越智バレエ団の越智久美子先生が就任。そして糸尾バレエ団が協会に新加入。現在、日舞三団体、洋舞二団体の構成です。

一宮舞踊協会では毎年芸術祭参加事業として「合同舞踊公演」を開催してきました。

前回の六十回の時は、日舞とバレエのコラボレーションを試みてみました。



合同舞踊公演 日舞とバレエのコラボレーション



合同舞踊公演 長唄「松竹梅」各会の会主達



こま希久会「童の詩」

幸い好評を頂いた様で、出演者達も楽しんで出来たと喜んでいました。また、いつか新しいチャレンジでもしてみればきかと思っています。そして三年のブランクが有りましたが、今年の十一月六日に一宮市民会館で「第六十一回合同舞踊公演」を開催いたしました。

久し振りの公演でしたが、ご来場の皆様からのご声援に出演者一同、次回もより良い舞台をとの合言葉で終演いたしました。

こま希久会の事

三年に一度の「日本舞踊発表会」が昨年の五月で二十回。その間は「ゆか

た会」として今年で三十五回。私の主催する「こま希久会」の足跡です。生涯学習としていつまでも元気でいる為に、四十年、五十年以上続けている人達もいます。また、現在は私が稽古を始めた幼児時代と違い、勉強や部活も共に大変な時代ですが、忙しい合間を縫って稽古を続けている子供達には、大人になってから経験を生かして世界にはばたいて欲しいと夢見ています。

また外国の方の稽古もしていますが、日本の文化に興味を持ってくれる人がいる事は大変心強いことで、これからもおどりを楽しむ人達が増える様、願っています。

絞り染めのこと

デザイン・工芸・彫塑部門 一宮美術作家協会 / デザイン・工芸部・彫塑部 鴫飼 辰郎



写真①巻き上げ

私はデザイン、工芸、彫塑の三部門の内、工芸の部門で活動をしています。ひとくちに工芸と言っても多種多様な素材を用いた作品が制作されています。工芸展を見てもわかるように、布、土、木、竹、金属、革等々を用いた作品が展示されておりですが、私は染料を用いて布を染める「染色」をしています。染色といってもこれもまた技法は様々で、ろうけつ、友禅、型、絞り等があり、私は「絞り染め」で作品を制作して展覧会に出品しております。同じ部門に所属している林節子さんは「型染め」で作品を制作されています。日本での絞り染めの歴史は古く、正倉院や法隆寺に伝わっている布に絞り

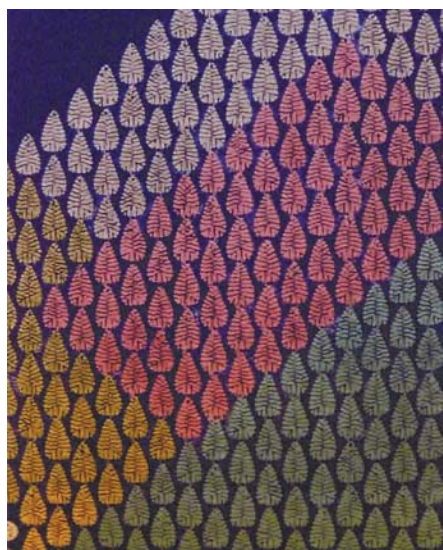
染めのものがあります。この頃の染色技法には「三纈」といって、「纈纈」、「夾纈」、「臈纈」という技法があり、今の絞り染めは主としてこの「纈纈」のことを言います。この地方で絞り染めの有名な産地としては、名古屋市緑区にある有松、鳴海があります。当地には、名古屋城築城の時に九州から来た人が伝え、尾張藩の保護の下に発展し、東海道の宿場ということもあり江戸時代以降の最大の産地になりました。本来、伝統工芸品の絞りは出来上がるまでの工程が分業化されており、下絵、絵付、括り、染色、仕上げ等それぞれが専門で職人として制作されています。余談ですが、それぞれの工程の間を取り持つ人を「影師」と言っていますが、これは恐らく表に現



写真②ツマミ縫い

れずに居るので影と言うのだと思います。絞りの技法ですが、かつては百種類ともいわれておりましたが、現在ではアレレンジ等を含めて五十程の技法になりました。私が展覧会に出品する作品は主にパネルですが、多種の技法の中から一、二種類程度の技法を用いて構図と色を重視して制作をしています。写真①は巻き上げ、写真②はツマミ縫い、写真③は唐松絞の変形です。

最後に、精巧に作られ鑑賞に耐える高級な工芸品を「上手物」と言い、反対に安価で粗雑な作りの素朴で大衆的な物を皆さんも聞いたことがある「下手物」と言います。面白いですね、ここから来てみたいですね。



写真③唐松（変形）

一宮市美術展



会場風景

11月17(木)日～20日(日)まで、一宮スポーツ文化センターで「第74回一宮市美術展」が開催されました。市内を中心に近隣市町村や、県外からも多数作品が寄せられ、出品者は524名で、審査の結果、入賞となった175点をはじめ、524作品が展示されました。

期間中は、約5、500人の方が会場を訪れ、作者の熱意・エネルギーを感じさせる多数の作品を熱心に鑑賞されていました。また、

今年は金曜日の終了時間が午後7時に延長されました。延長した時間帯には洋画・書・写真部門の種目別解説も行われ、高校生やお子さん連れのご家族など、普段では見受けられない方がご来場されていました。

各部門で入賞された方は次のとおりです。なお、同一賞内での掲載順は順不同です。(敬称略)

市長賞受賞作品は一宮市博物館で行われる「2016一宮市現代作家美術秀選展」(12月3日(土)～18日(日))でも展示されました。

日本画

審査員

鈴木喜家 大島奈知子

市長賞

高木俊一

教育委員会賞

中島淳志

美術展賞

高柳 襄 長崎 梯子

星野 真由 本多加代子

奨励賞

青山トミエ 瀧 廣美

入選 34点
森 賢二 湯浅真奈美



日本画部門解説

洋画

審査員

斎藤 吾郎 長谷川 佑

岩田 哲夫 後藤 泰洋

三輪 清弘 堀尾 一郎

大島 信人

市長賞

菅木 龍平 竹本 昭子

真野 純子

教育委員会賞

栗山 凌治 鈴木 孝治

水谷 律子 山田 佳南

美術展賞

奨励賞

森 耕太 浅野 なつ子
堀田 美智子 伊熊 睦子
藤井 忍 鹿島 恵美子
速水 基司 江口 和夫
則武 武子 中 山 昌明 倉地 彩子
木村 隆行 木村 忠嗣
鹿島 恵美子 神谷 久子
伊熊 睦子 柿原 テル子
浅野 なつ子 安藤 孝信

青井 トシ子 浅野 恒子
飯干 智子 伊藤 俊治
犬飼 純子 岩田 富雄
江森 操 柏崎 末次
河村 正子 近藤 富志雄
田中 勢智代 寺澤 裕見子
長崎 栄子 那須 響
日野 絹枝 平野 肇
古田 好子 松本 尚子
武藤 勇 森 健次
森 末子 森 田 孝
山田 美保子 横井 千恵

入選 158点

彫刻・立体

審査員

森 克彦 川原 孝文

市長賞

森 孝行

教育委員会賞

堀部美奈子

美術展賞

坂田 隆

奨励賞

渡辺朝喜

入選 10点

工芸

審査員

加藤陽児 林 節子

市長賞

入江順子

教育委員会賞

尾関祐二

美術展賞

大島忠敏 多治見正勝

宮田由美 村上浩子

奨励賞

大山 華 加藤文太郎

竹村清中 中西正美

西井美門 土方 輝

入選 40点

デザイン

審査員

服部純栄 岡崎美穂

市長賞

梅田春佳

教育委員会賞

水野博之

青山裕史

美術展賞

奥平美樹

奨励賞

梅村歩夢 佐橋広美

入選 22点

書

審査員

伊藤昌石 後藤汀鶯

武山翠屋 木戸竹葉

林大樹 岩田潤流

村田光柊 伊藤玄圃

市長賞

岩田佳川 片桐瑤雪

教育委員会賞

中山芳泉

岸田松峰 山口美茜

山内山抱 山口崑華

美術展賞

青井翠風 安藤静歩

飯田泰郷 石井玉華

井上嘉蓮 内出紅華

尾関明美 加藤瑞頭

川辺舟楫 神田鴻都

北村虹景 倉橋澄雨

五藤三禮 佐合華婉

戸谷嘉恵

内藤春翠

松永翠峻

山内妍翠

山田清翠

奨励賞

安達寿扇

梅村真琵琶

大塚雅泉

春日井澄高

小島華扇

酒井照苑

辻 映翠

永田張羽

鳩山煌華

前野樹風

松永溪月

宮田苔華

山本瑤華

入選 164点

写真

審査員

近藤誠宏

夫馬 勲

市長賞

牧野千恵子

教育委員会賞

桜井悦子

美術展賞

戸本有荷

濱田梨沙

森 皇穹

山田紅照

渡辺湖風

岩田展穂

大竹瑞光

大橋溪煙

川本青柊

小林 進

高桑愛降

内藤爽月

橋本佳静

平松豊泉

牧野瑞葉

丸井千尋

山路静竹

脇田玉波

青山浩子

今井彰二

大矢勝利

岡田忠夫

佐野ルミ子

高原寛徳

安藤正一

安藤雅彦

小原勇二

加藤紀子

辻 徳治

中村和夫

林 都美子

堀場勝行

入選 96点

今井要

内田昌臣

大矢真理子

尾関君代

千田陸末

渡部与明

安藤治仁

市川勝朗

笠野俊彦

隅川基巳

所 由紀子

橋本秀子

不破良夫

水野雅央



写真部門解説

文化情報



「松聲」 木戸 竹策

《市および市内公共施設の催し予定》

※一宮市博物館・三岸節子記念美術館
・尾西歴史民俗資料館について
○入館は午後4時30分まで
○月曜休館(月曜日が休日の場合は開館)、休日の翌日休館、12月28日(水)～1月4日(水)休館

一宮市博物館
〒463-2115

企画展「くらしの道具」

～おとな服・子ども服～

日時 1月14日(土)～3月20日(祝)
午前9時30分～午後5時
内容 昔なつかしい生活道具の展示を通して、今と昔のくらしの違いを見つめます。

観覧料 一般 200円

※市内小中生・65歳以上無料

講座「尾張平野を語る21」

～ウールが支えた洋装文化～

日時 ①2月5日(日)②2月12日(日)
③2月19日(日)④2月26日(日)
午後2時～3時

内容 一宮市域は濃尾平野の木曾川中流域左岸に位置し、尾張の歴史と文化の一端を担ってきました。さまざまな分野の講師を招き、尾張平野の歴史と文化を紹介する講演会シリーズの21回目となる今回は、洋装の歴史と文化について紹介します。

定員 各回先着100名(当日午後1時より整理券を配付)
※要常設観覧料

民俗芸能公演

日時 ①3月5日(日)②3月12日(日)
午後2時～2時30分
③3月19日(日)
午後2時～3時

内容 ①ばしよ踊②宮後住吉踊③島文楽
定員 各回先着60名(当日午後1時より整理券を配付)
※要常設観覧料

三岸節子記念美術館
〒632-892

常設展「三岸節子 身近な世界を見つめて」

日時 12月1日(木)～4月2日(日)
午前9時～午後5時
内容 フランスの近代美術に学びながら、豊かな色使いと創造力で展開された静物画や室内画を中心に、生涯の作品をご紹介します。

観覧料 一般 320円
高大生 210円
小中生 110円

※市内小中生・65歳以上無料

企画展「びじゅつ動物園」

日時 2月4日(土)～3月5日(日)
午前9時～午後5時
内容 虎や猿、鹿、狐、兎、犬、鳥など、生き生きとした表現で動物達が表された作品や動物を意匠化して表した作品を紹介します。

観覧料 一般 500円
高大生 250円
小中生 150円
※市内小中生・65歳以上無料

尾西歴史民俗資料館
〒629-711

※12月19日(月)～23日(祝)は臨時休館します。

歴史講座「歴史と民俗20」

歴史の虚と実

日時 2月5日(日)・19日(日)
3月5日(日)
午後1時30分～3時
内容 小説やドラマではなく、資料を読み込んで歴史の実像に迫ります。

定員 40名
参加料 無料

歴史講座「街道文化を探る」

日時 ● 2月26日(日)

午前9時～午後5時

内容 ● 宿場町の史跡が豊富な地域を訪ね、市内では失われつつある宿場の文化や歴史資料の大切さを学びます。

定員 ● 30名

参加料 ● 昼食代別・入館料1、0
00円程度

※要申込み。詳しくは広報1月号を参照

子ども講座「富田一里塚を守る」

日時 ● 3月25日(土)

午前10時～11時30分

(雨天時は翌日の26日(日))

内容 ● 美濃路の一里塚「富田一里塚」に今も残るエノキの古木について学び、木の治療を体験します。

会場 ● 富田一里塚(富田字古川・立石)

定員 ● 10名

対象 ● 市内在住の小学5年生～中学生

参加料 ● 無料

※要申込み。詳しくは広報3月号を参照

青少年育成課

☎(84)0017

ヤングフェスティバル

日時 ● 2月26日(日)

午前10時～午後3時

内容 ● 青少年グループ活動の発表会で、一般の方も自由にご覧いただけます。子ども向けのイベントもあるので、ご家族連れでもどうぞ。

会場 ● 木曾川庁舎2・3階

参加料 ● 無料(一部イベント有料)

経済振興課

☎(28)9130

経営合理化促進講座 新春トップ

講演会「異次元の金融緩和の持続と明日に向けての財政資源配分」

日時 ● 1月28日(土)

午後1時30分～3時

(開場は30分前)

講師 ● 田中直毅氏(経済評論家)

会場 ● 市役所本庁舎14階

入場料 ● 無料(要整理券)

※整理券は1月4日(水)より本庁舎
経済振興課、尾西・木曾川庁舎
総務管理課、各出張所、iービ

ル1階観光案内所で配布

一宮市消費生活フェア

日時 ● 2月18日(土)・19日(日)

午前10時～午後4時(19日は午後3時まで)

内容 ● 消費生活・食生活など、日常生活に密着した問題を研究し、パネルなどで発表します。

会場 ● 尾張一宮駅前ビル

入場料 ● 無料

(公財)一宮地場産業ファッションデザインセンター

☎(46)1361

ジャパン・ヤーン・フェア

総合展「THE尾州」

日時 ● 2月22日(水)～24日(金)

午前10時～午後5時

内容 ● 国内唯一の糸の展示会や尾州産地の素材、またそれらを活かした衣装等を展示し、繊維産業、ファッション産業の今をPRします。

会場 ● 総合体育館

入場料 ● 無料(糸の展示会は商談者のみ入場可)

一宮市 芸術文化協会 加入団体の 催し

『市民俳句教室』

【問合せ先】一宮市民俳句教室

☎(73)5504

日時 ▼ 12月18日(日)・1月22日(日)

2月26日(日) 午後1時～

会場 ▼ 一宮スポーツ文化センター
内容 ▼ 当季雑詠3句を一宮市民俳句教室委員が指導します。

(初心者歓迎)

参加料 ▼ 無料

申込み ▼ 当日直接会場

『市民川柳教室』

【問合せ先】一宮川柳社

☎(77)3479

日時 ▼ 12月18日(日)・1月22日(日)

2月26日(日) 午後1時～

会場 ▼ 一宮スポーツ文化センター
内容 ▼ 自由吟および課題吟を一宮

川柳社委員が指導します。

(初心者歓迎)

参加料▼無料

申込み▼当日直接会場

『瀟聲會定例会』

【問合せ先 一宮漢詩瀟聲會】

☎(78)7953

日時▼12月24日(土)・1月28日(土)

2月25日(土) 午前10時〜

会場▼中央図書館

内容▼漢詩文の基本的な読み方を
はじめ、作者の時代背景に
も触れながら初めての方

にも分かりやすく「唐詩三百

首」を解説します。(初心者

歓迎)

講師▼三島徹氏(東洋文化振興会

会長)

参加料▼月2、000円

申込み▼当日直接会場

『市民短歌教室』

【問合せ先 真清短歌会】

☎(51)3570

日時▼1月8日(日)・2月12日(日)

3月12日(日) 午後1時〜

会場▼一宮スポーツ文化センター

内容▼真清短歌会委員により実作

指導します。(初心者歓迎)

参加料▼無料

申込み▼当日直接会場

『瀟聲會作詩教室』

【問合せ先 一宮漢詩瀟聲會】

☎(78)7953

日時▼1月17日(火)・2月7日(火)

3月7日(火) 午前10時〜

会場▼中央図書館

内容▼漢詩文の作り方の指導をは
じめ、持ち寄った創作詩の

添削の検討を会員間で行い

ます。(初心者歓迎)

参加料▼年3、000円

申込み▼当日直接会場

『狂俳月例会』

【問合せ先 一宮狂俳壇連盟】

☎(78)5002

日時▼1月14日(土)・2月11日(土)

3月11日(土) 午後1時〜

(2月は午前9時30分〜)

会場▼葉栗公民館

内容▼各自10句持参、互選により

優秀作を記録に残します。

(初心者歓迎)

参加料▼無料

『新年短歌会』

【問合せ先 真清短歌会】

☎(51)3570

日時▼1月22日(日) 午後1時〜

会場▼一宮スポーツ文化センター

内容▼どなたでも(大会に先立ち

1月12日(木)までにハガキに

て雑詠一首提出)

参加料▼500円

申込み▼当日直接会場

『平成28年度支部講演会』

【問合せ先 (公社)中部日本書道

会一宮支部】

☎(62)1841

日時▼2月5日(日)

午後4時〜5時30分

会場▼一宮スポーツ文化センター

講師▼伊藤昌石先生

(公社)中部日本書道会理

事長日展会友 読売書法会

企画委員・理事 大和会理

事長興文会会長 松風会会

長)

演題▼「三体千字文から得た勉強

方法 楷・行・草から定

義を発見〜」

入場料▼無料(一般聴講歓迎)

『加入団体の催し』欄に情報を掲載しませんか？

このコーナーでは一宮市芸術文化協会加入団体の活動情報を募集します。掲載を希望される団体は、発行月3・6・9・12月の前々月15日までに、下記の必要事項を任意の様式にて記入の上、事務局まで提出してください。

必要事項

- ①行事名 ②団体名 ③問合せ先電話番号 ④日時 ⑤会場
⑥対象 ⑦参加料 ⑧申込方法 ⑨その他必要事項

提出先

〒491-8501 一宮市芸術文化協会事務局(住所不要)
または FAX 0586-73-9213

『いちのみや文芸』

第45集を

刊行いたしました

10月15日(土)に「いちのみや文芸第45集」を発行しました。随想・随筆、現代詩、漢詩、短歌、俳句、狂俳、川柳の7部門あわせて317名の方から寄せられた2、469作品を掲載しています。

1冊800円で一宮市役所本庁舎4階(一宮市教育委員会生涯学習課)にて販売しています。貴方も是非、お読みください。



愛知県文化協会連合会の

催し(報告)

愛知県民茶会

11月13日(日)、岡崎中央総合公園総合体育館を会場に、愛知県民茶会が行われました。

愛知県文化協会連合会と岡崎文化協会のご尽力により、12の文化協会と1つの地域の皆様が設席をされ、当日は11、000人を超える方が来場されました。

愛知県文連美術展

11月15日(火)〜20日(日)、愛知芸術文化センター地下2階と12階アトスペース、8階愛知県美術館ギャラリーを会場に第41回愛知県文連美術展が開催され、県下より341作品が入賞、入選に輝きました。

どの作品も大変見応えがあり、期間中には約1、500人の方が来場され、どなたも芸術の秋を堪能されていました。

愛知県文連西尾張部芸能大会

11月27日(日)、大口町民会館ホールを会場に、愛知県文連西尾張部芸能大会が開催されました。

10の文化協会の各団体が日頃の練習の成果を存分に発揮し、会場からは温かい拍手が送られていました。

本協会からは「神道一刀流剣詩舞会」(吟剣詩舞部門)の皆様が出演され、「春望・川中島・あゝ壇ノ浦」の演目を披露されました。その演舞は見ている者を魅了する大変素晴らしいものでした。



一宮市表彰条例 による表彰

9月1日(木)、一宮市民会館において市制95周年記念式典が行われ、当協会の故鎌田猛理事(吟剣詩舞部門)と久野以早夫理事(声楽合唱部門)が文化功労者として、その永年にわたる功績を讃えられ、一宮市長より表彰を受けました。

日本文学からみえるこの国の未来

日本文学研究者、東京大学大学院教授 ロバート キャンベルさん

十月十五日(土)、一宮市尾西市

民会館にて文化講演会が開催されました。講師にはロバート キャンベルさんをお招きし、ご講演いただきました。

【講演要旨】

二年前に伊勢神宮で二十一年に一度の式年遷宮が行われましたね。遷宮の夜に行われる儀式に向かつて、七、八年前から職人による作業が始まります。日本人はこのように未来に存在する目標に向けて働きかけていくということについて勤勉だと言われています。



二〇二〇年の五輪が東京で開催されることが決定した前の晩

私は日本人が五輪開催についてどう思っているかをインターネッで調べていました。その時は消極的な発言が多かったのですが、開催が決まった後はほとんどポジティブな意見に変わっていました。「原発やデフレ、全ての解決目標期限が出来た」という書き込みから、明確な目標が出来たことにより社会や自分に関しての七年間が立体的に見えるようになったことがわかります。「目に見える期限がないと、物事を真剣に進めようと思わないのが世の中。そういう意味で五輪開催は日本にとって間違いなくプラスだと思ふ」。この方も前の晩まではマイナスだと思っていたのでしょうかね。「プラスだとは思ふ」というところに心の変化を読み取ることがができます。これは昔からこういう発想で物事を捉える日本人

の特徴だと思えます。

明治時代の文献を一つ紹介します。文明開化の時代に活躍した文学者の中江兆民が、医者から腫瘍と診断されました。兆民は余命一年半と言われた後、「一年有半」というタイトルの本を書きました。目の前にあるまだ使い切っていない命の時間、それを前提として生きていくことを決め、そして生きていくために自分を支える一つの杖として付けたと言われています。今年の「いちのみや文芸」にも「杖言葉」という作品が出てきます。言葉をまさに杖としてこれから余命を生きているという古めかしく格調高い文章ですが、非常に味わい深い作品だと思えます。さて、兆民は余命が六か月くらいと聞いていたところに一年有半と言われたので「やっ」となりました。すごいですよ。五輪が決まって「万歳」はわかるけど「あと一年半」と言われて喜ぶ人は果しているのでしょうか。私は世界中の本を読みますが、自分の余命をそのまま題名にするというのは他に記憶がありません。

もう一人、同じ病気を患った

正岡子規を紹介します。子規は兆民が亡くなった後に「一年有半」を読み、残された時間で素晴らしい随筆を書き上げ、自分が働いている新聞社の新聞に作品を載せました。途中、新聞社に作品を送るための封筒百分に宛名を印刷してほしいと頼んだところ、驚くことに三百枚印刷してくれたそうです。これは励ますつもりで縁起の良い奇数倍刷ろうとなったのだと思えます。子規は毎日一枚ずつ書き、ついに百枚の封筒が無くなりました。百日という長い月日を経過した嬉しさは他の人には分からないだろう。しかしまた二百枚の封筒が目の前にある。この封筒が全部無くなったら病院の梅の花は咲いているのか。いなののか。未来に対する希望や夢、人々に支えられながら自分はどうのように生きていけるのか。子規はそこを作品で埋めていったのだと思います。

今日は未来に向かう人々の姿や心構えについてお話をさせていただきます。

[題字] 武山翠屋
[編集・発行] 一宮市芸術文化協会

[連絡先] 一宮市芸術文化協会事務局（市教育委員会生涯学習課内）
〒491-8501 愛知県一宮市本町2丁目5番6号
TEL 0586-85-7075 / FAX 0586-73-9213